

献 辞

西 節夫先生が2003年3月をもって定年を迎えられることとなった。本号は先生のご退職を記念してお捧げし、わたしたちの感謝のしるしとさせていただきますこととした。

西先生は1969年4月に文芸学部に着任された。まだ文芸学部が1学部1学科5コースの時代で、仏語担当の西先生は、独語、哲学、歴史などの担当者と同じく「一般教育」に所属された。

現在の文芸学部の外国語教育はグレード制を柱として行われているが、ここに至るまでの数次の検討委員会に参画し、基本構想の策定に尽力された西先生のご功績には、外国語教育に携わるわたしたち後輩が決して忘れてはならないものがある。

76年4月にヨーロッパ文化学科が創設されたが、西先生は85年度には学科主任就任、ついで大学院ヨーロッパ文化専攻主任として仏語・仏文学教育のみならず、学科・専攻全般にわたってその充実に寄与された。また大学院協議会委員、大学評議会評議員等々の学内要職を歴任されたばかりでなく、アルザス日本文化センター運営委員、『成城学園八十年』編集委員長、成城学園教育研究所長なども務められた。

学外においても日本フランス語フランス文学会幹事長、日仏文化センター理事、フランス語教育振興協会常務理事兼仏検顧問として長年にわたり活動、学会の発展と日仏文化交流に貢献された。

学内外においてのご活躍もさることながら、西先生は夙に19世紀フランス文学、殊にバルザック研究に専心され、幻想的・神秘的哲学とリアリズムの混在する作家の生涯と作品の解明に取り組んでこられた。近年は特に初

期の作品『ふくろう党』を取り上げ、フランスでの研修中にはヴァンデ叛乱の跡を踏査するなど歴史小説としての考察を精力的に継続されておられる。

呑み始めたらなかなか止まらない西先生の呑みっぷりは、近年その勢いをやや減じた感もあるが、もしかすると現在にいたるヨーロッパ文化学科の雰囲気醸成するに与って力あるかもしれない。それだけに定めとはいえ、お送りしなければならないのには淋しさが一入である。今後も時に酒席を共にしうることを願いつつも、あまりお過ごしにならず、百葉の長をお楽しみくださいますように。

2003年3月

横 塚 祥 隆